和訓に施された平声軽の声点

―平安末期京都方言における下降調音節の確認―

小松英雄

あらまし

図書寮本類聚名義抄の和訓に施された朱声点は、高山寺本や観智院本の名義抄にみえるそれと異なり、平声を軽・重の二類に分っている、この種の区別の存在は、従来和訓については確認されておらず、新たな検討が必要である。

平声軽の声点は、特に、

(1) 形容詞終止形の語末音節（シ）
(2) 形容詞連体形の語末音節（キ）
(3) サ行変格活用動詞の終止形（ス）

の三類に著しい集中をみせるほか、一部の語彙の中にも存在するが、それらもほとんどすべて、語末またはそれに準ずる位置の音節に限られている。

平声軽は、音調論的に上声と密接な関連を持っており、その調値は下降調であったと推定される。本資料にみえる、この特異な声調識別は、加点者の精緻な音声観察の結果得られたものであるが、その背後には、日本漢音の声調として実際用いられていた、《六声》の体系のあったことが明らかである。従ってここに特立された平声軽の音調が、直ちに平安末期京都方言そのものの、安定した《toneme》であったとは断定しがたいのであって、筆者はこれを《上声 toneme》の一変種と認めたいのである。

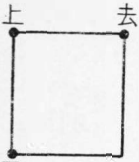
1、声調研究資料としての図書寮本類聚名義抄

従来、平安末期京都方言の声調を体系的に調査するためには、観智院本類聚名義抄[註1]（以下「観智院本」と略称。なお、高山寺本とあわせて、便宜的に「改編本」と呼ぶことがある。）が最も多く利用されてきたのであるが[註2]、この書は識語によって知られるとおり、改編されて以後少なくとも二度の伝写を経ているため[註3]、多くの誤写を含んでおり[註4]、なかんづく声点については、相当数にのぼる疑わしい例が見いだされる。しかしそれらを誤りと断ずべきなんらかの規範を、演繹的に設定することは許されないから、結局資料全体の信憑性ないし利用価値が、著しく減じてしまうことになる。語例の多いことが救いとなって、ある程度までの作業は可能であっても、最後的には蓋然性の規範に大きく左右されざるを得ず、孤例の処理に至っては特に困難である。

一般に、同一語が二箇所以上にみえる場合、相互の声点の位置が完全に一致するか否か、および所属不明の声点がどの程度存在するかは、その資料の正確性および均質性を判定するための、有力な指標と認めてよいと思われるが、図書寮本類聚名義抄（以下「図書寮本」と略称）はこの二点において、観智院本とは比較にならぬほどの精度を示しており[註5]、同期の声調研究資料中、最優位に立つべきもののひとつであって、これを十分に活用するときはいままですでになされてきた平安末期京都方言の声調についての研究を、更に細密化することが可能なはずである。

2、平声位置の声点の観察

観智院本の和訓に施された声点が、第一図に示すような体系を持っていることは、金田一春彦氏の御研究によって明らかにされており[註6]、もはや疑問の余地はない。図書寮本も同じく《類聚名義抄》の一異本である以上、同一の声調体系によっている可能性は大きいように思われるが、この基礎的認識の上に万一誤りがあれば、それに基づく研究に重大な錯誤を生ずるわけであるから、慎重な態度が要求される。



〔第一図〕

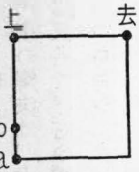
普通、点図の類では、乎古止点にせよ声点にせよ、すべての文字を方形とみなしているので、かなり複雑な体系をも、相互に明瞭な区別をもたせて図示できるのに対して、具体的な文字は必ずし

も方形とは限っていないから、実際に施されたひとつの点が、何を代表しているかを正確に判定することは、しばしば困難である。殊に声点は乎古止点と異なり、文脈による推定の手段をほとんど持たないから、一層容易でない。しかしながら多数の例を通覧してみれば、おのずからそれ〳〵の文字について、各声点の《基準位置》を知ることが、ほぼ可能である。このことを念頭において、本書の和訓の声点を分類してみると、観智院本にならって、第一図にあてはめて考えた場合、平声点の基準位置が定めがたい。すなわち上、去両声の声点に比べて、平声点の動揺が大きいのである。しかし更に子細に観察すれば、それらはある振幅で任意に動揺しているわけではなく、その間隔こそ極めて小さいが、左の二つの位置に、明瞭に分かれていることが明らかである。それは

a類＝文字の左下隅（第一図の平声位置）

b類＝a類より僅かに上

であって、第二図のようにあらわされる。もしこれが、声点の施された仮名字体の特異性などに基づく、単なる〝みかけ〟の現象に過ぎなければ、格別問題とするには当らないわけであるが、真にこの二つの位置が、有意的な差を持たせて加点されているとするならば、本書と観智院本（高山寺本も同様であるが）との間には声調体系の上で違いがあると考えなければならず、その点十分な吟味が必要であるし、また現在までのところ、和訓にこの種の区別を持たせて加点した例は、全く報告されていないようであるから、この事実が確認されれば、平安末期京都方言の声調の実態は、新しい見地から再検討されなければならないことになる。



〔第二図〕

3、b類声点の分布と確認

b類声点は、a類声点とは比較にならぬほど少数であるが、いまそのすべてを拾いだしてみると、付表Ⅰのとおりであって、概略的にいって文法的な形式においても、またそのあらわれる位置においても、甚しいかたよりのあることがわかる。つまり

(1) 形容詞終止形の語末音節（シ） 45例
(2) 形容詞連体形の語末音節（キ） } 16例
右に準ずるもの（キ） }

(3) サ変動詞の終止形（ス）　23例
の三類に著しい集中をみせるほか、右以外の諸例も、
(4) 語末またはそれに準ずる位置　24例
にあらわれているのである。観智院本において、平上の中間位置にある声点が、本来そのいずれかに属すべきものであることは、金田一氏の論ぜられたところであるが[註7]、同書の中間位置声点が全く恣意的に分布しているのに対し、この場合はまったく対蹠的であって、単なる偶発的事象としては処理できない。しかしそれがａ類声点と明らかに異なると断定しうるためには次の疑問がまず解決されなければならない。

(i)「シ」・「爪」・「キ」・「ヽ」などの字体の場合は、平声点の規準位置が本来明瞭を欠くのではないか。

(ii) 語末音節は、一般に不注意に加点される傾向がありはしなかったか。

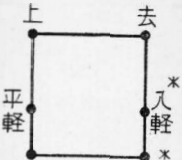
(i)の解決は、右三類の仮名に施された声点と、語末にあらわれる「シ」・「ス」・「キ」・「ヽ」およびそれらに対応する万葉仮名で、右の(1)・(2)・(3)・(4)のいずれにも含まれない他の語の声点とを比較することによって得られる。〔たとえば、**ココロヨシ**（快）**ａａａａｂ・２３９**と**ココロザシ**（志）**ａａａａａ・２５８**の語末音節の比較など。（ａ＝平声ａ類。ｂ＝同ｂ類。用例の下の数字は複製本のページを示す。）〕(ii)については、これら以外の諸語の加点の状態から、事実をもって否定することができる。従ってａ類、ｂ類の別は、有意差を持つと断定して差支えない。

4、《声調体系》の決定

遠藤嘉基氏は、本資料の和訓に入声点二例を確認しておられるが[註8]、同様の入声点が観智院本の中には発見できないから、両本の声点の種類に、ある程度の差のあることは否定できない。しかし両者の差異がこの範囲に止まるならば、それはまだ本質的なものではないといえる。なぜならば、観智院本で平・上・去の三声を立てていることは、その背後にとりもなおさず平・上・去・入の《四声》の体系があるものと考えられ[註9]、入声は当然その有無を意識的に検討された上で、該当する国語音がないために捨てられたとみるべきだからである。国語の促音をこれと別な観察者（すなわち図書寮本の加点者）が、別種の声調――すなわち漢字音の入声に類似したもの――と認めて特立したとしても、それは認識の違いであって《体系》の違いとは言えないであろう。しかし、いま平声点が明らかに二類に分かれているとすれば、右に仮称したａ・ｂ両

類はそれぞれ平声重および平声軽とみなければならず、もはや《四声》の体系外であるから、図書寮本の声点がいかなる声調体系を持っているかは、新たな問題として提起されることになる。もちろん諸書にみえる二四声とか三二声とかいう区別は、形而上的な分類であって実用的意義を持たぬと思われるから除外するとして(註10)差当りこれが《六声》の体系を持つか、あるいは《八声》の体系によっているかを検討しなければならないのである。すなわち平声に軽・重の二種を立てながら、入声にこの区別を行わぬ第三図のような体系は例をみないから、少数の入声点についても、その軽・重をあげつらわなければならぬことはいうまでもないが、この外に、上・去両声の軽・重の別の有無をも明らかにする必要が生ずるのである。入声点についての調査および、それをめぐる諸問題の考察は別稿に譲って、いまは触れないこととするが(註11)、上・去両声の声点を慎重に検して得られた結論としては、この種の区別を行った形跡は全く認められないので、《六声》によっていることはほぼ確実であるし、また本資料の反切や類音にさされた朱声点も明らかに漢音の六声の体系によっているから(補註)、和訓の声調識別に加点者がそれを応用したものとして、無理なく理解することができる(註12)。従って本資料の和訓の声調体系は第四図をもって示されることが判明するのである。

〔第三図〕



〔第四図〕

5、平声軽と上声との関係(一)

第2項においてb類と仮称した平声軽声点が、特に三つの語類に特徴的な集中をみせていることは、同項において指摘し、かつ付表Ⅰに例示するとおりであるが、同じくこれらの語類に属しながら、しかも語末が平声軽に終らないものを集めて付表Ⅱに掲げる。これを通観すれば、左の事実が知られる。

(1) 付表Ⅱの全語例を通じて、語末音節はすべて上声に終り、平声重、去声に終るものは全くない。

(2) 同一の語で、付表Ⅰと付表Ⅱにまたがるものが少なくない。

平声軽声点の基準的な位置は、概して平声重のそれよりも、多少浮上った感じに過ぎず、疎略な観察をもってしては、ともすれば識別できないほどであるから、文字の左上にさされた上声点と不注意に紛れることは、まずありえない。しかるに、平声の軽と重との間には、実際には画然たる区別があって、その混用は皆無であるにもかかわらず、かえって平声

軽声点が位置的に遠い上声点と右の様な関係にあるのは、いかなる理由によるのであろうか。本書の声点の一般的な正確性に照らしても単なる誤写や誤点として処理してしまうことは、非常に危険であって、この平声軽は、何らかの意味において、平声重よりも上声により近い性格をそなえていたのではないかといふ想定のもとに作業を進めてみる必要がある。いま右の三類の語について、付表Ⅰ・Ⅱを量的に比較すると、第一表が得られる。

〔第一表〕

	上声 例	上声 %	平声軽 例	平声軽 %
形容詞終止形語尾	48	**52**	45	**48**
形容詞連体形語尾	1	9	11	91
サ変動詞終止形	1	96	23	**4**

この比率が平声に軽重を分かたない改編本系の名義抄でどのように変化しているかを比較してみることは、平声重平声軽および上声の三者相互の関係を明らかにするための重要な手がかりを提供すると考えられる。改編本におけるそれらの分布は、第二表に示すとおりである。(註13)

改編本系では、訓点本その他から採録した和訓のかなりの部分を、辞書的な形に改めた形跡がうかがわれ、そのため連体形は減少していて量的処理が困難であるが他の二類——中でも形容詞終止形の語末音節——においては、両本とも上声の比率が、第一表の図書寮本の場合に比較して著しく大である。(約五〇%対約八〇%)。この比較において、もちろん採取した用例の総数や、具体的な語彙の違いなどに対して、厳密な考慮が払われねばならぬわけであるが、概略的にみても、上声点の比率が改編本と図書寮本とで80%—50%＝30%といふ大きなひらきをみせていることは、見逃しえない事実であって、有意差と断じて差支えなく、その原因の究明は、声調史的に重要な意義を持つと考えられるのである。

〔第二表〕

	観智院本 上声 例	観智院本 上声 %	観智院本 平声 例	観智院本 平声 %	高山寺本 上声 例	高山寺本 上声 %	高山寺本 平声 例	高山寺本 平声 %
形容詞終止形語尾	約260	約**80**	約70	約20	**78**	85	14	15
形容詞連体形語尾	4	27	11	73	2	50	2	50
サ変動詞終止形	18	78	5	22	2	100	0	0

6、平声軽と上声との関係(二)

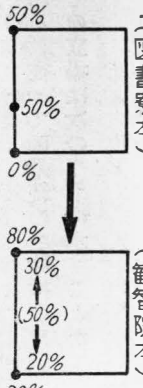
右に対する説明は、しかしながら、現象そのものの把握ほどに容易ではなく、いくつかの解釈の成立する余地がある。いま現実性の薄いものは除外して、以下の三つの考え方の当否を検討してみることとするが、これらの立場は互いに矛盾しあっているから、真に成り立ちうるのは、ただひとつしかありえないわけである。

(1)、改編本の編纂当時、またはその伝写の過程において、平声軽声点の存在を無視して、《四声》の体系にあてはめて機械的に原型本を模したことによる。

(2)、平声軽から上声への、声調変化の過渡期における、ふたつの異なる段階の投影である。

(3)、両系統本のよりどころとする声調体系の違いが原因である。

解釈1、平声軽声点は、平声重と上声との中間位置にあるため、その過半数が不注意に上声点に混入されたとするこの立場は、第五図のやうに図示できる。しかしこれは前提においてすでに大きな誤りをおかしているために、到底肯定できないのである。すなわち、前述のやうに平声軽声点の基準位置は上声と見誤られる可能性がほとんどないほど左下隅によっていて、もしこのような統合が起るとするならば、ほとんど全部が平声になるはずだからである。(註14)従って観智院本の序文など、一見この観点を支持するようにみえても、事実との背反が明らかである以上、否定されざるをえないわけである。



〔第五図〕

解釈2、次に、この平声軽をもって代表されるある種の声調は、図書寮本加点当時、すでに上声に移行しつつあり、時を隔てて成立した改編本は、この変化のより遅い段階を反映しているとも考えられる。(註15)一層おそい資料――たとへば中世のある時期に加点された浄弁本拾遺和歌集において、平型形容詞の終止形の語末音節が、(註16)すべて上声になっていることなどもこの考え方に有利のように思われる。つまり、図書寮本加点当時、すでに相当程度（約五〇%）進行していたこの変化が、改編本成立のころには一層進み（約八〇%）、浄弁本拾遺集加点以前のある時期までに完成されていたと考えられないこともないのである。だがこれも前述したように、図書寮本において、同一形容詞の終止形の語末音節に、(註17)平声軽と上声の声点が混用されているのはなぜだろうか。たとえば「サガシ」は十例みえるうち、

上声　6　　平声軽　4

といふ分散を示し、また第三項(4)の語彙の中にも（付表Ⅰ参照）「ミゾ」のように

上・上　3　　上・平軽　1

と、一様でないものがみいだされる。声調変化が漸移的におそう場合でも、その推移の過程におけるひとつの共時的断面をとれば、同一個人の同一語に対する声調認識は、普通それほど不安定だとは思えない。以上の理由から、(2)の解釈によることはできないようである。

解釈3　最後に、《四声》と《六声》との体系的相違に、理由づけを求めてみることとする。すなわち、六声における平声軽の音調は、四声においては平声とみなされず、《上声 toneme》[註18]の一変種をなしているというみかたに立つわけである。従って両系統の名義抄の声調はそれぞれ別個の基準によっていて、直接的な関係を持たないと考えるのであって、その立場は次のやうに示すことができる。

《六声》	《四声》
平声重	平声
平声軽	上声
上声	

元来、上・去・入の三声に対立して一類をなすべき《平声》を、更に細分したのがその軽・重であるから、これを一括するときは、当然《平声》の一種に合一するはずであって、右のやうな分属現象の起るのは、一見奇異であり、その上図書寮本自体についてみても、漢字音の声点の中ににこの種の移行（平声軽→上声）が全く認められないので、この解釈の妥当性は疑問のように思われる。しかしながら、字音の声調を根拠としたこの原則論が、和訓の声調の場合にも杓子定規に適用しうるか否かがまず問題である。前記のように、これらの音節には、同一語が極めて接近してあらわれる際にも、なお平声軽と上声とが混じているのであるが、「解釈2」が肯定されない以上、平声軽の調値は、上声のそれと近似していて、熟練した観察者の内省をもってしても、上声と常に画然たる区別を行うことは、困難であったことが想像される。なおこの差の由来が、引用した出典の別にあるのではないかとも一応疑われるが、実際に調べてみると、その想定の正しくないことがわかる。[註19]従って、たとえつまり、和訓とそれにさされた声点とが出典を共有していると仮定しても、加点者独

自の批判的立場から取り入れられたことだけは確かである。

いわゆる monosyllabism を基調とする中国原音において、声調のもつ機能は甚だ重要であるし、それが原音から脱化して「仮名で再現しうる形」ないしそれに近い形にまで変って以後は、声母及び韻母の簡略化にともなう同音異義語の比躍的増加の代償作用として、その機能が一層増大するわけであるから、学習者は声調の習得に多大の注意を払い、その延長として、和訓にもまたその識別を行おうとしたことは、自然な過程として考えうるところである。しかし、国語と漢語の声調は、畢竟異質的なものであるから、同一の規矩をもってしては律しえないのである。すなわち字音の大部分は、二音節ないし二音節的に発音されたため(註20)、音節間の相対的な高低関係の把握が比較的容易だったのであるが、それを国語の個々の音節の高低に準用しようとしたところに、困難の原因があったのである。平声軽は字音の声調として、音韻論的には平声の範疇に摂せられるに違いないが、それと近似の音調は国語の場合独立した toneme としての安定性を欠き、意図的に識別しようと試みても、結局上声の典型的な音調と、ともすると混じやすかったが、改編本系では国語の音調として同一の toneme に属するものを、あえてそれ以上細分しようという意図をもたなかったため、平声軽相当の音調は、最初から上声として加点されたとみてよいであろう。また字音の声調の確認や維持のためには、韻書の類が専書として行われていたのに対し、和訓の声調標示については字音のそれをはなれて日本語独自の性格に則した普遍性を持つ典拠や、拘束力を持つ規範を欠いていたために、観察者および観察態度のちがいによる、相当程度の自由性を持っていたと考えてよいであろう。要するに平声軽は、国語の声調として、安定した toneme の位置を占めがたい性格のものであったにもかかわらず、図書寮本加点者の精緻な音声観察の結果として識別され記録されたと考えられるのである。ただ以上の様な立場からするならば、改編本系においては、問題の音節にすべて上声点が施されていなければならぬはずであるにもかかわらず、実際には観智院本約二〇%、高山寺本約一五%の平声点が存在するのであるから、それについての説明が必要であるが、しかしこれは単なる誤写として処理して必ずしも武断に過ぎはしないであろう。一見二〇%という数字は多すぎるように思えるが、両本の、他の語彙における少なからぬ声点の誤写の比率や、特にこれら問題の声点が語末音節に集中していることなどを考慮に入れるならば、この程度の誤りは、あえて異とするに当らないのであって、以上の論拠の重大な支障と考える必要はないと思われる。

以上は主として、形容詞終止形の語末音節を対象として論じてみたのであるが、他の二類についても、これとほぼ同様

の論が可能である。

7、平声軽の具体的調値

平声や入声の軽・重は四声の下位区分であって、中国原音においては、声調論的に重要な意義を持っていなかったものであるが[註21]、日本字音の体系の中では、明瞭に識別されている。ここで注意しなければならぬのは、中国語の声調体系において、厳密な弁別の必要がなかったことは、日本語の場合にもまた、それらがたがいに類似していたことをただちに意味するものではないという事実である。声点がたがいにあい接しているのは、中国原音の声調体系においては、それらがいはば、level を異にする下位区分に過ぎないとする意識が加点者の脳裡に働いているからであって、それを根拠として、調値そのものの近似性までも論じようとすることは、大きな誤りといわなければならない。

いま存在の確認された平声軽について、以下その具体的調値の再構を試みるのであるが、それは勿論単独にとりあげることはできず、あくまでも《体系》の一環として考察しなければならないことはいうまでもない。

日本における四声（＝声調）の諸相に関しては、小西甚一氏の、特に古代字音のそれをめぐる御論考[註22]と、金田一氏による。一層広範囲にわたる御研究とがあるが[註23]、それらの中で両氏とも、平声軽を下降調として再構されている[註24]。豊富な資料を駆使してなされた両氏の御論証は、もはや再検討の要が無いほどに整然たるものがあるので、ここにはただ和訓の声調にみいだされたこの新しい事実が、右の説をもって矛盾なく説明できるかどうかを中心に吟味するにとどめたいと思う。

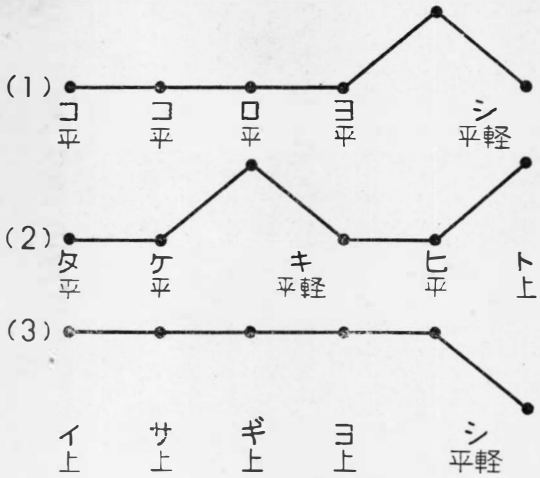
再構1、アクセント型についての基本原則から、

平声重および上声が、それぞれ低平調・高平調であったという前提に立てば、平声軽は平調ではなく曲折を持った音調で、しかもその曲折は、日本語アクセントの本質的性格から考えて、複雑な曲折ではなかったとみるのが妥当であろう[註25]。なお母音の quantity は、平調音節に比して長めであったと思われる。いまこの条件に合うものを探せば、下降調と上昇調とがあるが、まず前者と仮定すると次のやうになる。

すなわち、下降調を便宜的に分析すれば、

下降調＝上声＋平声[註26]

となるから、いま形容詞の終止形と連体形の語末音節が平声軽である場合を再構すると、第六図（1）＝平型形容詞終止形



〔第六図〕

(2)＝平型形容詞連体形・(3)＝上型形容詞終止形）の如くになって、中低型のやうな変則形を生じないので、都合よく説明できる。もちろん音節数が増減しても、この点について変りはないし、サ変動詞の終止形は、もともと一音節であるから別に問題がない。また、第二項(4)の類の中にも、この解釈によって、中低型を生ずるものはない。

しかしながら、これを逆に上昇調と仮定すると、平型形容詞に関しては一応の説明が可能であっても、上型形容詞の場合は、第七図に示すやうに、中低型を生ずることになるから、穏当でない。従って、この立場からは下降調説をとるべきである。

再構2、現代諸方言との比較から、

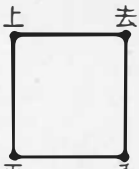
金田一氏の御研究によれば、現代諸方言において下降調のあらわれるのは、語末または、平声音節の直前に限られているとのことである。[註27] 筆者はこの方面の知識を全く欠いているので、氏の御説をそのまま拝借して考えてみると、付表Ⅰに収められた語のほとんど全部が語末にあり、残る少数の語中音節の例も、概してこの原則に反しないから、[註28] その点からも下降調説の成立に支障はないわけである。

以上の検討の結果、平声軽声点は《下降調》を代表することがあきらかになったので、従来の説とあわせて平安末期京都方言には、次の四種の声調が確認されたことになる。

低平調―平声重　　高平調―上声（軽）
上昇調―去声　　下降調―平声軽

8、上昇調と下降調

上昇調と下降調とは、ちょうど正反対の関係にある一対の音調であるにもかかわらず、改編本系では、前者を一類とし



〔第八図〕

て特立しておきながら、後者を立てていないのは、いささか問題であるが、これは決して上昇調の方が下降調よりも明瞭に聞き分け得たとか、あるいは下降調は声調論的に《上声 toneme》の一部に含まれるのに対し、上昇調は一個の独立した toneme であったとかいう理由によるのではなく、第6項、解釈3において得られた帰結のように、図書寮本と改編本との声調体系の相違によると解すべきである。すなわち第八図に独立した位置をあたえられているか否かが、この違いを生じた最大の理由と考えられるのである。(註29)

9、ひとつの応用例

以上縷述した諸点のうち、解釈を加えた部分については、異論の余地が多々あるにせよ、現象の存在そのものは、事実として認められてよいと思う。そこでこのように行きとどいた図書寮本加点者の音声観察の結果を手がかりとして、ひとつのささやかな国語史的事実を明らかにしてみたい。

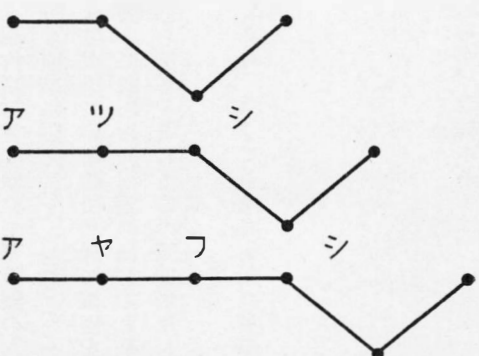
《モダス》という動詞は、上代から諸文献にあらわれており、現今もなおその化石的用法を残している語である。にもかかわらず、平安時代以前の活用型は、いまだ確実には知られていない。(註30) ただ覚一本平家物語巻十一・腰越の状の部分に

勲賞行はるべき処に、思外虎口讒言によて、莫大の勲功をもだせられ云々　(岩波文庫・下三三七)

とあり、八坂本もその部分は同じであるから、(註31) この限りにおいて、明らかなサ変動詞と認めてよいと思われるが、断定のためには更に多くの用例を必要とするし、また一方には、左のやうな例も見出されるのである。

黙音墨　モタル（平・平濁・〇）　(観智院本仏下本一三一)

これから想起されるのは、



〔第七図〕

くだる—くだす　ながる—ながす　ひたる—ひたす

のやうな対立であって、もし観智院本に誤りがないならば、同様に

モダル—モダス

の関係が成立することになるわけであり、モダスはサ行四段活用とも考えられるのである。

この語は、源氏物語をはじめとする一連の仮名文学作品には用いられていないようであるが[32]、訓点資料の中には必ずしも稀ではなく、春日政治博士はその中から左の二例をあげて、断定は留保されながらも、モダスのサ変説を支持する有力な根拠とされている[33]。

和上ノ尼ハ某甲トイフ者、黙然セヨ　（斯道文庫本願経四分律）

僧已ニ忍シテ黙然セルカ故ニ　（同）

だが慎重を期すならば、やはり「黙然」が音読ではなく訓読されたという確証がない以上これを〃きめて〃とすることはできないわけであって、博士が断定を避けられた理由もそこにあると考えられる。

ここで思いおこされるのは、サ変動詞に著しい集中をみせた、図書寮本の平声軽声点である。それらは問題の《モダス》を除いて、第三表のような分布を示している。従って、この語の末音節につけられた声点が平声軽であればサ変と断定してよく、上声ならば幾分その可能性を含み、平声の場合はサ変以外のサ行動詞とみて、ほぼ誤りないはずである。実際に調べてみると、

陰（中略）書云モタス（上・平濁・平軽）

であるから、ここに終止形の声点をもって、サ変動詞と判定できるのである。孤例ではあるが、資料の正確性から推して、信用してよいであろう。

〔第三表〕

	平軽	平重・上
サ変動詞	22	1（上）
サ変以外のサ行動詞	0	用例全部

万葉集には《モダ》という体言があり[34]観智院本にも幾つかこの訓がみえているから、畢竟《モダス》は、体言《モダ》に、サ変動詞《ス》が複合して成立した動詞であろう。この動詞の用法が、終止形と連用形にかたよっていたため、右の語構成が忘れ去られて、あたかも、本来的な一語の動詞であるかのように意識されてしまったことが《モダル》を生む直接の契機になったと思われるし、また体言《モダ》が古く《アリ》と結合して多く用いられていたことも[35]、この語形の成立の一因となったのかも知れない。ただしこの《モダル》の実際の用例は現在のところ所見がない。

あとがき

本稿は、昭和三十一年十一月の国語学会研究発表会で発表した内容の主要部分を、論文の形に書き改めたものである。草稿は亀井孝・金田一春彦両氏に、細部にわたって御閲読いただき、御指摘に従って表現を改めたところが少なくない。心からお礼申し上げる。

付表 I

(i)、平型形容詞の終止形が平声軽に終るもの。

アヂキナシ 無端125　アヂキナシ 無情・遊237　アハシ 淡・集22　アマネシ 淡・選55　アマネシ 斑・論169
アマネシ 恒・詩251　オモシロシ 風流・遊17　カマミスシ 讙・列81　キラ〳〵シ 潔67　クハシ 子細・集298
ココロヨシ 快・記239　コヒシ 戀・白251　サガシ 嶮嶬・集143　サガシ 岨・選143　(ト)タカクサガシ
嶕嶢・選144　(ト)タカクサガシ 崔嵬・選143　サムシ 凜々・選67　シゲシ 滋・後48　シロシ 素・詩289
タカシ 傴僂・選104　タクマシ 快・易239　タダシ 忠・論238　トクトシ 激迅・詩15　ナツカシムズ 懐論
244　ナツカシムズ 懐・論273　ヒサシ 恒・易251　フカシ 浚・書53　フカシ 沖・老子経15　フカシ 淵・
詩17　彌奴久之 悪・朱249　メヅラシ 非常・遊278　ヤスシ 懐・273　ヤスシ 懐・詩244　ヤ井〳〵シ 謙・
白92　ユルシ 慢・集248

(ii)、上型形容詞の終止形が平声軽に終るもの。

アツシ 渥・後52　アツシ 淳・選54　アヤフシ 非常278　イサギヨシ 清・書11　イサギヨシ 潔・選67
イサギヨシ 絜・詩316　ウヂハヤシ 嶋・集143　ウトシ 踈・記114　ハナハダシ 非常278　ハナハダシ 異
常・遊278

(iii)、型不明の形容詞の終止形が、平声軽に終るもの。

イヤシ ○○f・陋・選206

(iv)　平型形容詞の連体形が平声軽に終るもの。

アヤシキ 奇・選125　アヤシキツクリ 詭制・選80　サガシキ 険・選200　多計岐比止 壮士・和235　知比佐
岐古介 石髪・和147　知比佐岐毛乃 樟・和335　ヒサシキイカリ 淹恚・列258　ヒサシキイカリ 滞怒・列242

フルキ 陳２０３ フルキネ 陳根・月２０３

(v)、右に準ずるもの。

於保岐宇美 冥渤・和６ オオキナリ 洪水・書４ オホキナリ 浩・選１４ オホキニ 純・書２９３ オホキニス 豊・選１２９ スコシキ 平上平ｆ・小・詩２７５ スコシキ 平上平ｆ・細・記２９８

(vi)、サ変動詞の終止形が平声軽のもの。

(ト)ス将・選６８ ウツクシムズ可怜・遊２５５ ウトムズ跼・論１１８ オホキニス豊・選１２９ カタムズ訒・論８６ クミス組３１２ 久美須紕・季３１６ 之豆加爾須譚・季８０ ツミス坐２２９ ナダラカス圩・論２３２ ナツカシムズ懐・論２４４ ヒヂリコニス泥３９ フシヅケス縦・集３１４ フトコロニス懐・集２４４ フトコロニス懐・礼２７３ ホムルマネス譽・史記世界９９ ミヅクロヒス法用・遊５ モダス 陰・書?２０２ モトホシス縁２８９ ヤスムズ 慰・詩２６１ ユタカニス豊１２９ ヨウス能１３３ ヨクス繕・詩３１３

(vii)、その他・平声軽音節を含む語。

阿世美蘇 平平平ｆ・汗溝・和２３（蘇＝濁） 阿乎度 平平ｆ・礒儲・和１４９ 衣江・和６ コハクネキ 平上平上ｆ強絽・詩３２１ サマラバレ 平平上平ｆ莫惜・遊２５５ シヅメタリ 平上ｆ〇〇・靖・白１２６ タテリ 平上ｆ堅・後１２３ タテリ 平上ｆ・峙・選１３８ ツクリ 平平ｆ・製・選３３６ ツネ 上(平)ｆ・常・切２７７ ツネニ 上ｆ上・恒・記２５１ ツヒニ 平ｆ上・訖・白９９ ツヒニ 平ｆ上・終３０６ ナイフ ｆ〇〇・諱・彦９８ ハツル 平平ｆ・琢・書１６４ 比伊須由礼流 平ｆ平平上平・冷酢・和６７ ヒトヘ 平平ｆ・縝・論３１８ 比呂米 平平ｆ・昆布・和２７８ マヘダレ 平平平ｆ・楪３３３ マヘダレ 平平平ｆ・楪３４０ マヘダレ 平平平ｆ・袜３３７ 末和太之 平平上ｆ・埱帯・和２１８ ミゾ上ｆ・溝２３ ヲハヌ 上平ｆ訖・律９９

付表Ⅱ

(i)、平型形容詞の終止形が上声に終るもの。

アヤシ 詭・選７８ アヤシ 詭・選８０ アヤシ 懐１６６ アヲシ 碧１６５ イタシ 惨・集２５３ イタシ 恫・書２７３ ウルヒアマネシ 零洽・後１２ オホシ 紛・切３１３ カマビスシ 諠・公８２ カマミスシ 諱・切８２ キビシ 密・詩１３７ 岐比之 緻・和３１７ クハシ 細・書２９８ サガシ 峻・詩１３８ (ト)サガシ 崔嵬・集１４３ サ

ガシ 阻・選203 サガシ 峭・集144 サガシ 隘・列200 (ト)タカクサガシ 峥嵘・選144 サワガシ 躁・公114 シゲシ 繁・選304 スクナシ 希・論285 スベナシ 気絶・遊302 (ト)タカシ 峥嵘114 (ト)タカシ 嵳々・選144 (ト)タカシ 嵯峨・選144 (ト)タカシ 磴々148 タノシ 悰・集240 チカシ 隣・書204 ツキ〳〵シ 擧止・遊132 ヒトシ 均・易219 ヒトシ 埒・白227 フカシ 淵・詩28 フトシ 硬156 ヘダタリナガシ 阻脩203 ヤスシ 綏・論311 ヨシ 哀・書330

(ii)、上型形容詞の終止形が上声に終るもの。

阿加之 緹・季293 アツカハシ 結繚321 アラシ 壚・集215 宇知波夜之 跨・季113 ウヅタカシ 堆・公230 オソシ 謇・論87 オソシ 慢・集248 カタシ 堅・詩233 カナシ 哀・詩340 ツタナシ 慱・記266 ムナシ 沖・白69

(iii)、平型形容詞の連体形が上声で終るもの。

ヨイカナ 愁哉・後269

(iv)、サ変動詞の終止形が上声に終るもの

ニクミス 悪・論249

備考 ＊異体字は漢字かなともに通用の字体に改めた。＊配列は(1)訓(2)声調（自明のときは省略）(3)被注漢字(4)出典(5)複製本丁付の順である。＊出典略号は、吉田金彦「図書寮本類聚名義抄出典攷」参照 ＊分類については、注15参照。＊fは平声軽を示す。

註

註1 ここに引用した三種の類聚名義抄は、いずれも原本筆者未見。それぞれ次の複製本によった。

図書寮本 宮内庁書陵部複製本
高山寺本 京都大学「国語国文」別刊
観智院本 貴重図書複製刊行会複製本

註2 金田一春彦「類聚名義抄の倭訓に施されたる声符について」（「国語学論集」）その他。

註3 中田祝夫「類聚名義妙使用者のために」など参照。

註4　岡田希雄「観智院本類聚名義抄考」三、観智院本の誤写に就いて　参照。

註5　「ハカル」は全10例中　9例まで平平上であるが

塞　ハカル（平上平）　224

だけが例外になっている。しかしこの種の異例はほとんどみあたらない。

註6　註2引用論文参照。

註7　同右。

註8　遠藤嘉基「訓点資料と訓点語の研究」一四一ページ註3参照。

註9　《四声》という語は以下声調一般の称としてではなく、《六声》その他に対して、平・上・去・入の四種の声調という意味に限定して使用する。

註10　小西甚一「文鏡秘府論考」研究篇上　参照。

註11　「和訓に施された入声点―平安末期京都方言における促音の一面―」（仮題）近く発表の予定。図書寮本において入声にも軽・重を分っていたことは、確実に推定できる。

註12　入声の軽・重は、本稿の段階では未確認なので＊印を付した。

註13　観智院本の用例数に「約」の字を付したのは、同書の声点の主観的な判別による誤差を見込んだからである。しかしもちろん全く判別に窮するような例は採取していない。

註14　（上略）片仮名有朱点者皆有証拠亦有師説（下略）という文章は、改編本編者が、その準拠した書にあった声点を故意には改めなかったであろうという推定を可能にする。そう解すれば、この様な結果になったのは、無知に基づく過失ということになるが、この論理には大きな飛躍がある。

註15　図書寮本の形容詞終止形および連体形のアクセントは、すべて左の二類、四種にまとめられる。（平声重＝l　平声軽＝f　上声＝h　音節数＝n）

第一類　甲　l(n−1)+f　　nⅣ2

乙　l(n−1)+h

第二類　甲　h(n−1)+f

乙　nh

以下第一類を《平型》、第二類を《上型》と呼ぶ。なお観智院本、高山寺本名義抄その他の資料は、両類ともに乙類のみである。

註16　築島裕「浄弁本拾遺和歌集所載のアクセントに就いて」第三部（「国語アクセント論叢」）参照。

註17　付表Ⅰ・Ⅱ参照。「タカクサガシ」を含む。

註18　'Toneme, の概念その他については、左記の書を参照。

Kenneth L. Pike: Tone Languages. University of Michigan Publications Linguistics IV. Ann Arbor. 1948.

註19　付表Ⅰ・Ⅱ参照。同一出典の同一語が、両表にまたがっている例は少なくない。

註20　かな一字の転写字音が古くから二音節的に発音される傾向のあったことは、諸先学のしばしば指摘されたところであるし（たとえば、吉沢義則「井々竹添先生遺愛唐鈔漢書楊雄伝訓点」など）また、普通かな三字で転写される字音も結局二音節として発音されていたことは、たとえば

　　者ク（借）　観智院本・仏上20

など、豊富な例で証明できる。

註21　四声の軽重論は中国本土におこらず、かえって日本において盛んであったこともこの事実を裏書きしている。

註22　註10引用書参照。

註23　註2引用論文参照。

註24　小西氏は注10引用書において、平声軽を高平調とされているが、個人的な御教示によれば、それは論述上の不備であって当然下降調となるべきものであるとの由なので、両説一致として取扱う。この点については、金田一春彦「日本四声古義」（「国語アクセント論叢」）末尾参照。

註25　Rising-falling や falling-rising のような複雑な音調が、日本語の toneme ないしそれに準ずるものの典型として存在していたとは考えられない。

註26　あくまでも nearly equal の程度においてである。

註27　金田一春彦「現代諸方言の比較から観た平安朝のアクセント」（「方言」七の六）参照。

註28　「ツネニ」と「ツヒニ」が一応異例となるが、これらはそれぞれ二つの単語とみるべきであろう。

註29　本項の問題は、いずれ別稿においてもう少し詳細に論じてみたい。

註30　「大言海」以下の諸辞書は、ほとんど連用形をあげてサ行四段活用とする。サ変説をとるのは「広辞苑」ぐらいなものである。

註31　福島邦道氏の御示教による。

註32　総索引の公刊されている諸書について調査した。

註33　春日政治「斯道文庫本願経四分律」（「古訓点の研究」所収）参照。

註34　かな書きは左の一例だけである。

咲けりとも　知らずしあらば　母太毛安良牟　この山吹を　見せつつもとな　（万十七・三九七六）

しかし、この歌との類似から、

咲きぬとも　知らずしあらば　黙然将有（もぜもあらむ）　この秋萩を　見せつつもとな　（万十・二二九三）

の「黙然」を〈モダ〉と訓ずることができるほか、三五〇・五四三・一二五八・一五九二・一九六四・二三〇二・二八九九・三三〇四などの例も、これに準じて考えられる。

註35　前註参照。なお春日博士は註33所引論文の中で、次の例を指摘されている。

黙然　二合毛太安流己止（興福寺本日本霊異記）

補註　〈漢音〉と特に限定したのは、実際の訓点本などで、漢音の声調に声点によって六声を識別した例は普通であるのに対し、呉音資料に適例がみいだせないからである。

―東京教育大学大学院学生―